かぶき考

抱月書屋主人

本間文庫
文庫 14
A116

文庫14
A116

宮城県図書館

伊の御廟おろそかなるも数の夏をは
出羽の国の府に残りて鎌倉あり
さまざまふるきなどぬ鎌倉考は之ぐ枝ち
もとてかれたれの書ともより多まぜるひろひ
かきせーものなり次第も整はね八采擬も
博かるべし地理を主とせる所あり書跡を

主とせる所あり事跡を主とするも固より
主人が意境懐古の料とする意なるべきさる
かゝる夫の考證家のひゝみる做ふことは
せず面白しとおもはるゝは怪誕信
況といふとも舎てすゝて揚げたるを引き
用ゐる書は河井友水が鐘愛志、中川喜
雲が鐘愛物語、更科日記、平家物語、東鑑
遊山紀勝、南部集、牧山詩鈔等にて
文章は力めて京とのゝ態を損はさるゝとせり
さの外に鐘愛大草紙、鐘愛記、源平
盛衰記、太平記、異本勇戦物語、金槐集、
西行家集、名所歌枕など調べかゝりし

かどもりのさてはゆ立といふる狂形の身まも
ふの忙しき心地してきくる筆とめつ
来て日すは山心水意の竹枕いかに
なるしかるん
[illegible]
ひろくと書る春の夢や
雪の筆

むかしのおもかげなるは夕といふる文月昔
の夕、青田をとくる風の末ぐ簷の
風鈴をおとなふ虫こ
抱月しるす

抱月書屋主人

（寛永年中の作）

○河井友水の鐘金書志にいはく

相州鎌倉郡は詞林采葉抄云、鎌倉とは鎌を埋
む倉とぞ詞なり其所臨鶴は昔し大鎌財鎌を埋
鎌ゝと申せし比宿駅の事まして此宿の事なり
の時此由比の里の宿に玉ひける夜夢を感し年来
所持し給ひける鎌を今の大殿の松風に埋み給ひけ
るゝ鎌倉郡とぞ因之思ふに歌に鎌倉山の
松とよみつくるなり鎌を埋む所松の風なればわが
（中略）と有今称する大鎌財鎌を埋み給ひし地八
今の上宮の地なり此地を松風と名く故に後の山を大
臣山と云なり此地は本と稲荷社有しを頼朝卿

建久三年の地主稲荷を西のおかに移して八幡宮を
此地に勸請し玉ふ是取て上宮を松ヶ岡の八幡宮と
いふなり社務の三傳ふるなも上の宮を松ヶ岡と云下の
宮を鶴岡と云ふ云々万葉集の歌に（作者不知）
茅渟なる鐘倉山のまさる木を松とながいはく
忘ひつてやあらん

又茅渟方の歌に
かきくもり雨ふるとき音なきは
鐘倉山に道やまとくる

大納言公任の歌に
ひさし草かりつむはのりなりけり
あともとめぬ鐘倉の山

慈鎮和尚の歌に
あはれ心のいろろ
鐘倉山のまろ花薄

法印覚慧の歌に
都おもふ春の夢路もうちとけぬ
あはれくらの山の嵐や

鐘倉山とは大臣山を云ともあり源順の和名抄鎌
倉郡の内に鐘倉の里あり何れの地をいはんも不
分明大臣山を鎌倉山といくは雪下を鐘倉里
云々茅渟方の歌に
民もまさにきはひ栄けり秋の田を
かりておさもる鐘倉の里

又続古今集に鐘倉右大臣の歌に
宮柱ふとしきたてよろつよ

今うさのくん鐘倉の里

夫木集ニ藤原基綱の歌

もゝしきのたちさかえまさしる戸の

けふり賑ふ鐘倉の里

又

東路やあまくだる都のその中をいかて

ちよくくらに栄えそめけん

中務卿宗尊親王の歌ニ

十とせあまり五とせまても住みなれて

なほ見まくほしぬ鐘倉のさと

とあり墨すると東鑑ニ陰陽権助国道云所謂

四境とは東は六浦、南は小坪、西は稲村、北は

山内とあり然れハ此内を鐘倉と云くし鶴岡記

録ニ云、鐘倉谷七郷と云小坂郷、小林郷、峯山郷、

津村郷、村岡郷、長尾郷、矢部郷、を云なり鐘倉

七切とは、名越の切通、朝夷名切通、巨福路坂、亀

谷坂、假粧坂、極楽寺切通、大仏切通、此外ニ

小坪切通、稲荷坂ありしと

○

中川光雪ニ鐘倉物語ニ云（宝暦板）

（前略）墨氏の陳之丞おきあ陳ふ公方世おとろく陳

ひてより農人のすくなくとはかれしとそもやくる由

来ある古跡ハ今も尽さしあるハとひきまゝせる

なり

花も月も見るや桜の葉の

叶笑ハ中川光雪作なり）とも元の都より月

のもさしるかりしハ鎌倉より帝都ニ

大樹のおほんもとまで直かつ此老所くを狂句のつゝね詞のつけ点部のさうしとなりて御見を通草といひていまく持ちちりぢのぬものちれば今は物のさり北鎌倉の孫をひいきけてその通草をかりとるものくそ

[redacted] 又云く東鑑にいはく

本社（鶴岡八幡）は伊予守源頼義朝臣を兼て安倍貞任征伐の時母祈の旨有て康平六年秋八月潜に石清水を勧請し瑞籬を営国由比の郷に建つ（今の下宮の旧跡也）永保元年二月陸奥守源義家修復を加ふ其後治暦四年十月十日源頼朝公祖宗を崇めて高倉の御山を廻して宮廟を構へ鶴岡の宮を此所に遷し奉る一ちれともまた華構の詩りに及はず

北条義時の誓ひをねすり建久二年四月六日鶴岡若宮の上の地に始めて八幡宮を勧請し奉る高倉殿を管作せらる今日上棟也云々

○ 鎌倉志に云

新拾遺集に左兵衛督基氏の歌

鶴の子にすこもりをれを吹風の雪井にひくえ

夫木集に為定卿の歌

鶴の子あをく翼のさまけて

ゆきをうつれ春のうくひす

又定国朝の歌

山ちかくしてやまつる里ちかき

鶴の子くるゝ春のうくひす

法印定禅の歌

ゆくほとをきす

此のまゝ春の暮れも仲つゝまし
たてるや鶴ヶ岡の松ヶ枝
社家を紀右を雪ヶ下といふ所に板屋あり
法印安慧ヶ窟の春ふかき跡あはれなり其の上の
花ゝの古へる雪の下道
と詠ずるを東鑑又寿永元年二月鶴ヶ岡の
社殿より由比浜に横を直して詣往
の道を造らるゝ此度北條殿の祈りに依て
此儀を始めらる朝廷手自供給ふ仍て北条
殿已下各こゝを運はるとありて
○
鎌倉実物供云
建久三年若宮の上の地より副て二八幡宮を勧請し
給ふ上の若宮是なり統後撰集左衛門督
五倩ヶたのみをかるゝ（はるかなるく
世ともすむとさゝけ　きけ
◎東鑑云
建保七年乙卯七月九日実朝卿軍右大将をいかのは
神なるみはゝ退出鶴ヶ岡上宮に詣の御ゆ
此木陰に立て暫時御祈を密に奉りて
今日の勝負兼て告を示するいつあるす此殊
る庭前の梅を見給ひて禁忌の和歌を詠ぜらる
いてこいなはまなき宿となりぬとも
軒端の梅よ春をわするな
云々
◎又云東鑑云
文治二年四月八日伊与守頼義経妾の静の義

若宮の興廃ニて大殿望ゟ芸曲を奏す鼓
は左衛門尉祐経、とりやうしは富山重忠、静ゟづ
るを吟す

吉野山峯の白雪ふみわけて
入る人のあとぞうれしき

次ニ別曲をうたふ

賤や賤しのおだまきくり返し
むかしを今になすよしもがな

ゟて静下向はこの月朔日男子平産ニて七月九
日仰ゟて赤ゟをはあ逗新三郎由井の浦ゟ
出てせ〜むゝゝ

○鐘金柳説ゝ云
（云異）今の上のゟのにて雪ゟりくゝるゟ段のゟ見る柳

堂の
ゟとゝふあり平泉堂は泉の部ゟ有ゟは柳の
ゟとゝふ説あり

鐘金や鐘金山ゟ鶯ゟ泉
千年ゟる雪ゟ泉〜の柳ゟ泉あれゟゟけりな春の雪ゟる

右た大鳥の歌ゟゟ

○鐘金ゟゟ云
柳ゟは八幡ゟ舞殿の辺ゟ東ゟ所堂の前ゟゟを云ふ
昔し柳の多かりけるゟ因て也今尚柳株在て里俗
て古歌あり作者不知
ゟゟへたる鶯ゟ泉〜つ柳ゟ
青みゟけりな春のしるしゟ

○又云
素材の旧跡は八幡ゟの東の山際ゟあり是を富山重忠ゟ

屋敷跡は節替橋の西世なりて
鐘倉の十橋とは琵琶橋、節替橋、歌の橋、勝ヶ橋、
裁許橋、針磨橋、夷堂橋、逆川橋、亂橋、十王堂
橋をいふなりと
軽朝屋敷は島合原（八幡宮の東の島居の外の畠
也）の東也其廣さ八町四方はかりありと
法華堂は西方の東の国なり相傳ふ、頼朝の
持仏堂の名也と東鑑に建暦元年十月十五日
長明入道蓮胤法華堂に参り糸竹流経の間
懐旧の涙頻りに催す一首の和歌を堂の柱に記
して曰く

草も木もわすれさし秋の霜きえて
むかしの苔を拂ふ山風

大悟宮の土塊は覚園寺の東南二階堂村の山の
傍にあり二段の石屋なり内は八畳布はかりもあり太
平記に建武元年十月二日大悟宮を足利直義うけ
取り鎌倉へ下し奉りて二階堂谷に土籠を造りて
入置参らせける後に乱起るに及て直義河辺伊
賀守義博に命じて云、如何様謀とならばいさは
兵部卿親王なり此は急き某師寺に配流
して宮を刺殺し進てせよと下知せられけれ八義博畏
て第の侯として建武二年七月九日に殺し奉る法
名は数の中へ入れなりしを理敬之隠
の長老奉行の事管むとあり
東光寺の旧跡は大悟宮土塊の別の田也と宝華集
に義堂東光寺に詣て大悟宮を弔ふの詩あり

恬影稜々半入雲、主除屠竹栖啼痕、松中餌気
衛天就、門外与塵世隔、山畠不驚乾鳳
質、野意那識帝王尊、興亡不上得傳眼、
只見靈光獨存、

獅子山巖は永福寺旧跡（土籠の世ろ）の世、山嶺にあり岩
の形獅子の如くなる故に名くなり

瑞泉寺は御界一覽亭あり登る事一十八曲の坂なり
夢窓国師は亭にて歌あり云く

ものすごかさなる山のいほりして
木まばらにて夜の白雲

如竹詩多し（今は積を枝くのみ全くは無きに就て尤も）

貶瑞泉一覽亭　唐人　胡元明

欄干繚繞錦峯頭、塊視三山與十洲、翠玉一
峰知華岳、青煙九點見齊州、無穴雲接蒼梧
晚、不尽波涵碧海秋、便欲駕詩招李白、御
風騎気共仙遊、　元

文覺屋敷は大師堂の西の方軽朝屋敷の南向にあ
り云々

大賢谷は釈迦堂の東隣にて土俗衣掛谷ともいふ
云々山上の山を衣張山といふ相傳ふ、軽朝卿大姫を
咎るに此所の山に夏日山に衣をはり雪ふり掛
ると如云々て見給ふ故に名とあり或云昔叶地
る比丘尼寺ありしに彼比丘尼杖の枝に衣を掛
け晒せしに直木後に根葉栄えて今山の上にあ
る二本の杉の大木なりとぞ云々
唐絲土籠は釈迦堂の南にあり三傳ふ

常経は手塚太郎光盛の女なり軽朝を仕へ居け
る木曽義仲へ内通して軽朝を殺さん為め
脇指一を懐中より隠し置けり遂に露はれて
討たれぬとぞ聞えし

猶川は上野には桃川とふ浄妙寺の前より下
まで流れ猶川とふ其下又笹の実者のこゝろ川
南魔川、とふ川六名有青砥藤綱の屋敷も
此辺にありけるかとぞ

公方屋敷は浄妙寺の東世野にあり此所保奉氏の旧
宅なり代々関東管領の屋敷なりを持氏の弟
満子成氏後下野の古河へ退き且又義氏鎌倉
へ帰居を願ふの由、鶴ヶ岡の殿文数通あり何
れのはかも古河の公方に帰りあるとて扇をもせず

今は世野ゝてをけりと里老語れりとぞ
稲村は極楽寺の南あり西道の東の方に稲を積
たるが如くの山あり故に稲村と名くとぞ太平記に新
田義貞元日の夜半に鎌倉へ攻寄せ明り月に敵
の陣を見給へば世ノ谷の角より山高く道
迫にて橋を掛て数万の兵陣を
張て兵庫たり南は稲村崎まで沙頭路狭きに
浪打際まで逆木を引けり引懸て沖四五町う
程に大船どもを並べて矢倉をかき楯矢射させと
構へたり誠に難攻の陣の案手付はて引ぬきも
理なりと見給へば義貞馬より下り給ひ海
上を遥に伏し拝み給ひ玉ひ
けれ八月夜の月の入方に前に更に干る事も

なりける稲村ヶ崎例かるに二十余丁干上て平地
となり横矢射んと構えたる数千の兵船も落行
潮之さりはれて遠の沖迄深よりとあるに所
なりとぞ
袖浦は稲村崎の西海岸にあり順徳帝の
御製之
袖のうらのたのの浪よりもおろさりさ
いかなる袂の色を染ひて
空蒙の歌之
袖のうらなまぬるのうらみてて
ようても堂くやくるなみの礼
西行の歌之
きなみの ひとりやねなの袖の浦

きはく陸之よる舟もなし
鴨長明の歌之
浮みをはうらみて袖をぬらすもと
さしも知や底のさゝら砕けて
七里浜は稲村崎より腰越迄の間をいふ古
戦場なり今も太刀の折れ白骨を砂の間に
て有といふ比所なり鉄砂あり里きさと染のもし
ゝ又花見とてうつくしき貝あり貝を拾て作り
なすする也桜貝ともいふ桜色なる故也ゝ
腰越村は江島の前の村なり旧と子死窓と書
きたりといふ国福寺は義経の陣ゝし所なり
とゝふゝ
袖の浦は腰越おより江の島へ行直道あり夏

左の院近なる夫木集
ちもきよし祇の傅のかしこあるハ千島の
あとをたえすとはなん
国栗川は国栗おなあり蒲綱る牛の尻するを
見てそそセーもヒ歌なり又宇曾紀王將軍職
をやめられて信濃の国の歌
ひろきてまくさ尺もさとも片栗の
又蒲原屋相うこの
うちわたす今やしはひのかるる世の
おもひしよりは長きそのの
唐衆は片栗川の東の衆をいふ更級記に唐
う衆すなはちいみじう白く大和なでしさいく
うすく錦をひけるやうなるなりとあり夫木集
に藤原忠房の歌
知らしをはて虎やふすらん事飛なる
ありとしるもろすの衆
鴨長明の歌に
すとつまくよながよ
夢踏うちもきもろすの衆
信中村の三の
はるかなる中さうけれ夢なりて
老く見ふけりもろすの衆
とありそ
附上衆は片栗より西よ富る雲物語りこ、とかみ
ぶ衆を過るる野衆の露のひまより風ふさるはれ

庵のなく声さびしくけれハ歌

えはたのくすのしけみよ事あまて

とかみくるあるわ庵もなくなり

鴨長明うゑ

うゝもきとかみくるあるゑ歌とめて

かゝ世の川のしほひをうまつ

又

ちかくるなかいは者ゑ時ひけん

とかみくるあのくすのみかれ

又

八つまつの八千代のかけるおもなれて

とかみくるあるゑもかはゝし

江の島又緒の島とも云す院基は役の行者

なり後之覚の用具ゑかゝとふゝふゝ鴨も羽のゑゑ

江のしまやさして俗路あとなる

神はちかひの保かきなるくし

性り覚禁ゑ歌ゑ

ちゝさゝとと江のしはすりやゝさすゝ

庵の上なる山さゝゝのな

菊侯和尚ハ江島弁財天ハ別後髪、馬蹄猫と擬春祝宋大休

西公坐意禁茗、策杖往り踏巨鰲、洞口

千尋石磴遊、龍門三級浪先高、迦知ハ

角天侯外、華水辺惟純幾尊、

俗雅投は高合より西のちくりなる云

○鐘金物伝ゑる云

され人雷雨物語りよげきひ仮のうしとよ立所時宗の道
し女あり根原原大信生のかくさるる女のあるとよ
立よりてよもすがら拵ひて時々うるとて刀をとすれお
けれ人もの物ゆとよりて刀を持つのはーけるとて
いそくとてさすが刀をとるうるは
おもつよりとや人の見るらん
かげすくさおをひかりて
うるとておさてうしー物のまうる
ちくすのみさうさすがありけれ
えて世界立印少てなられをれつるあそひれ
なりもくさるいあねとも世るある身なるは原大さ
けおもひかつられしひく人は諸遣のさはるけはおも
しろうりけるを筆る昭人をも世をもうるも

（かうすとて
あふと見る梦路ときまる有をつな
つるを立筆るみもつくしむ
えて
なすなるぬ心の山の高けれ人
おくのふかきを尋ねすくいれ
すつる身ゝなほおもひてとなるはは
とふるとられぬ情なりけり
えて
○
きしな月記えて
（前墨）唐河原といふ所もすなわちいみーう白きを二
三月中く夏はやまとなでしこの開く屋く錦をひける
やうなれ咲きたる立れ八結の末なれ八見れぬと

いふに花所にうかれいでつゝ、あはれげに咲きこぼれ
り、唐河原に傳ひ躍るの咲きけるなど人々お
かしかること

○平家物語に云く

（前略）鎌倉殿は軍兵七萬八代にすゑ置き我身
はその中におちしなかりし、九郎はすくよき男なれば
此畳の下よりも這ひ出でゝまゐるべきなり　されども頼朝
はせらるまじとぞ宣ひける、全く謀に仰すまじて犬
臣父子請とり奉りてこれより判官をは腰越に追
ひ返さる　判官にはされば何事ぞや去年の春木
曽義仲を追討せしより以来今年の春平家を
責くだしはて、内侍所をつるしの御箱を
相具く都へ返り入れ奉り、剰大将軍大臣殿父
子生捕りにして具して下りたりしかば、假令如何なる不
思儀ありとも一度はなどか封国なかるべき、凡九国の
総追捕使にも補せられ山陰山陽南海道いづれ
なりとも預けられ一方の固めにもなされんずるかと
おもひしに、さはなくして纔に伊予の国許知
行すべき由宣ひて鎌倉中へさへ入れられずして
腰越へ追ひ上げられしこといかなる事ぞ、凡日本国を静
むることは義仲義経がしわざにあらずや、たとへば
同じ父が子にて先に生るゝを兄とし後に生るゝを弟
とするばかりなり　天下を知らんに誰かは知らざらん
謝する所を知らずとつゝやかれけれどもかひなき
ことく

○巣居翁の函山紀勝みるべく

鐘倉懐古（坂東）

赤旗影乱拝寵光、一門流涕盡塵埃、三千佳麗歸春夢、百二都城剣夕陽、萬寺唐留金鎖甲、名駒空繋柳垂鞭、梅花不解当年恨、又向東風滴晴香、

白旆光々動敵空、東征西伐壓群雄、八州兵甲如蓬北、四塞山河似画中、酒酹松楸凉雨路、悲禾黍夕陽紅、金人應溝秋風淚、尚尽興亡生棘叢、

大江廣元墓

春草萋々泣古墳、江公塚畔墓雲寒、當年投筆収図籍、倚劍綸巾有、千古英雄把誰比、一生功業下評難、荒才恰似荀文若、不佐皇家佐阿瞞、

土窟

窟裡深宮誰典鳴、鬼雖鐵馬復神京、鵂鶹悲啼春將暮、蹄跡飛塵不明、未見牙璋烽無忌、卻聞黄屋遶甲生、千秋第一傷心事、彼兎唐存良狗烹、

○南部集

紀七里候入鎌倉之日皇古戰場、感懷作歌

伊昔録倉古障堡、新田猶得自此道、相陽獨餘十万兵、守隘無地雷霆怒、稲嶋回岸海水高、旌旗閃々通洲島、三軍義烈匹鬼神、大將沈璧烏縣禱、須臾廣平退潮乾、海変桑田彼

天造、前歌已聞校郊墅、殺傷積骨如獲薙、
攫搶暴出相山搖、海濤顛倒大鯨死、君不見
古來戰場血流國、今日主客皆黃土、黃土空埋
著精魂、設使尺鉄無全鋒、洲沙漠々行人望、
唯有當年老古松、

曉發鐵金

偏憂鐵金曉、荒烟遠市朝、星留霜氣、海月
送殘宵、西路心還折、東閨身未遥、僮從會者
倍、重更問漁樵、

鎌倉懷古七首

維昔奔鯨膝海情、君王高枕付戎衣、中原宝剱無
拯免、御府彤弓有是非、一身黎民歸將墨、孟
令弟子弄兵機、鎌倉不公山河固、試上丘墟討
落暉、
相甲吊古比盤旋、霸主樓臺康久年、雄異不終
三世幕、遠畿唯有八洲船、馬空空繩留寒影、
鶴去風頭入晚烟、行到琵琶橋上望、依然海
嶽堺春天、
高臺昔日散黃金、入幕賓僚淚水深、存骨
人傳射虎亂、焦丘傷守歲付心、羣山草木
隨榮辱、法樂不啻雍門琴、
漁父樵童歌未
畢、古今山迫落日頭、古年形勝寵貔貅、月下漁
復持弓矢、星井何須辨斗牛、多少旌門烏鳥
艘、南東農畝麥華秋、時翁拓自迎人浪、
指點徒教客子愁、

闔国相山碧海通、拔図感慨古今同、華燭
両聞人寂寞、雞鳴夜三司北作雄、社稷頻移
盟主地、壇場無恙應神宮、嘗丘元自称族伯、
誰料紛帰田氏印、
百年拝主楊鐘重、大盥幷存仁義才、後宴就
宴酣天狗舞、前廷闘罷旅葵来、一朝膏
血沾青草、九世城池委赤灰、宝戒寺邊杉柏
裡、風含鐘磬至今哀、
元弘天子節旄頽、相地接槍隆北面、玉几紛
帰遼北極、筆華無聽狩南山、莫言海外東
無守、應為京師朝不絹、誰識文王今日政農
桑四布關郊開、
延江集

〇

東鑑

治承五年七月二日丁丑、若宮管作の事有り、直世法師、而かる
に鐘を鑄るに於て可然の工匠なきを以て、武蔵国、鎌倉大
工字御司を召し進ずべきの旨、師書を彼の所の併
法人、まの中に下さる、昌寛之を奉行す
今昔甲午、鶴岡若宮宮殿上棟、社頭の東の方に
假屋を構へ、武備義御し玉ふ、師泉人守直南に候ず
工匠に御馬を賜はる而して大工の馬を引くべきの旨
源九郎主に仰せらるべきの由、折節下手を引くべきよ

なるの由之を申さる度ねて仰せ曰く富山次郎次
郎佐貫四郎等之を候まる上は何ぞ其仁なきの由を申
さるべや是れ偏一ならず所役甲下の由をなど事を左
右る宗せて難渋せるるか者ば九郎主既る恐怖
して則起座而匹を引く初の下手は富山の次郎
重忠、後は佐貫の四郎、庫綱なり、此外土肥の次郎
実平、工藤庄司景光、仁田四郎忠常、佐野太郎
忠家、宇佐美の平次実政、等之を引く甲の刻る
事終て武衛退出せしめ給ふと
又云く
文治二年四月八日丙申、二品(頼朝)并ひ2御亭所鶴ヶ
岡の宮2詣給ふ静女を廻廊2召出さる
元暦毎曲を施さしむべきを依てなり 此事去ぬる比
仰せられ所2病痾の由を申し参らず身の不肩
る於ては左右る能はずと雖も徴州の妾として恩ち
揚馬の砌りる出るの条、既る恥辱の由日来内々之を
慎ぶり申すと雖も彼は既る天下の名仁也適て参而
して帰洛近きるあり其芸を見すんば無念の由啓
所也 然りる以て勧め申さしめ給ふの間、之を召さ
る倫る大菩薩の冥感る備ふべきの旨仰せらるる
近日又別儀の恐ありて更る舞曲の業ねきの由
臨座猶固辞す然ども再三及ぶの間、
愁ぶいる白雪の袖を翻くして、遍くし黄竹の歌を発す
左衛門尉祐経敵うつ、是れ数代勇士の家の
生れ抽賞の基なを継くべきと雖も一箭上月の勝
を歴て自ら歌吹の曲を嗜まざるの故る世役

る候まうか金山節重忠銅拍子打て静先つ歌を吟
し出して云く

吉野山峯の白雪ふみとけて
入りそし人のあとぞこひしき

次別物の曲を歌ふの後又和歌を吟して云く

しづやしづのをだまきくりかへすもかな

もと
誠に是れ社稷の壮観深産も弱れと動きつつ
上下皆興感を催ほす三品の仰せに云く八幡宮の
寶前に於て舞を施すのはむも関東の尊厳
を祝ひふべきの所なり聞きて日ず所をも憚らず又
匠の義経を慕ひ別曲を歌はんと奇怪と云ふ御
臺所報申されて曰く君此人とありて豆州に在
しまし給ふの比、吉野山に於て芳契ありといつとも
北条殿時政を怖れ潜かに之を引き籠めらる
而れとも猶君に和順して晴夜に迷ひ深雨を
凌き君の所に到れとも亦無を構へ別れを出で
給ふとき独り伊豆の山に残り留り君の恋を
知らすは夜魂を消す直然と浮すれば今の静
の心のめし強川多年の好みを忘れて恋慕は
すんば貞女の姿にあらす外に形はの風情を
常せて中に動しの露膳を謝すむも断云
といつて屈し拒けて賞賜一切のくしに付る御情
りを休むに云少時の御夜直仰華重盃を
簾中より押し出だし之を給ふ云々
又云く

同閏七月廿九日庚戌、静男子を産生す是豫州の息男たり期を待たるゝに依て今に帰洛を抑留せらるゝ所なり而かるに其父関東に背き奉り謀逆を企て逐電す其子若し女子たらは早く母に給はるべし男子たるに於ては今襁褓の内にありといへども争でか将来を怖畏せざらんや未熟の時命を断つ条宜しかるべきの由治定す仍て今日安達新三郎に仰せ由比の浦に弃てしむ之より先き新三郎御使として彼赤子を請取らんと欲す静敢て之を出さす衣に纏ひ抱き臥して叫び喚ぶこと数剋に及ぶの間安達頻りに磯禅師を譴責す殊に恐れ申し赤子を押し取り御使に与ふ此事御台所御悲歎之を申し宥めらるといへども叶はず云々

○

鎌倉志に云く
鎌倉に十井あり棟立井(かねたての)、瓶井(かめが)、甘露井、鐡井(くろがね)、泉井、扇井、底脱井、星月夜井、石井、六角井、此を鎌倉の十井といふ云々

源氏山は英勝寺の境内西の方の高山也北山亀が谷の中央なり詞林採葉抄に亀谷の山は鎌倉の中央第一の勝地也とあるは此山なり云々鎌倉九代記に源氏山と申すは古へ八幡太郎義家東国征伐の為め下り給ひ鎌倉に於て此山に旗を立て給ふ故に源氏阿倍貞任宗任をせめられし給へば或は旗立山とも名くとあり云々義堂武庫山(むこのやま)の詩あり
憶昔神人鏖甲兵、至今武庫有山名、峰如

創世記――如戟、好興、君王鍾不平、そ

阿佛卯信跡は英勝寺の後の北の石ふりそ
知岸寺谷は阿佛卯信屋敷の西北の谷英勝寺の境
内ありそ地蔵は鶴ヶ岡の供僧正覚院なるあり
之をドコモ地蔵とふ相傳ふ初め堂守りの僧あり
金完ゐして佛飼ゐ供すくき物ちきかゐ井地を借
れて他所ゐ移して居住せしと思い定む且夜の夢
ゐ地蔵枕本ゐ現ーてとまもくとはちいゐて失
せゐけり彼の僧此意を悟りてどまもくとは何しも
同下苦の世界なりと云ふ事なりてそて居を不
移一生を終りけるとなりそ
葛宝岡は假粧坂を越えて北の野をこなり昔し
相模入道ゐサ殿藤原俊基を害せし地なり

太平記ゐ俊基は詳更謀叛ゐ張本なれハ近日ゐ
鎌倉中ゐて斬り奉るべくとゐ定めけるさて俊基
ゐ張り懸ゐ乗せられて俊秩父二郎左衛門清取て葛原岡
ゐ上ゐ坐し給えり俊基曼紙を取出し絶世の
筆を給ふ「ちゐ来一句、無死無生、方寸雲尽、長
江孔清、筆を置けバ月を打とあり神州鎮ゐ
徳元年俊基又関東ゐ下され葛原ゐて十月
廿九ゐ誅せられけるとなり、
秋をまちて葛原はらゐ消ゐ身の
露のうゐ〜みやせゐ残らん

そし
景清籠は扇谷より俊秩父へ参る道の端ゐ大慶

窟あり、惠七丘屋景清筆也、
報恩正宗屋敷の跡は勝橋の南の町西頭也、
又四の前稲とゝ小祠あり、正宗がまつりたる神なりと
佛師運慶屋敷の跡は正宗屋布の西なりと
人丸塚は黒黒神の東の方畠の中にあり、惠七兵
衛景清がめの人丸といふ者の墓なりと伝ふ
鶴ヶ屋布は黒黒神の東南の畠をいふなりと

○
桃山詩鈔

金沢紹宜侯次昆溪韻

蓮相銷尽海光明、大鏡周之拭更明、把酒正逢秋
色動、令人轉惜夕陽傾、梦中山水真能到、却
役亭臺旋已成、負恨小游慳一宿、雙檐之聽夜
潮声、

壁軒林樹影蒼茫、一縱青燈耿臥床、不待夜
深山雨到、地呼雪下耳先涼、

湯八幡祠

憶鬼龍貌祥祠前、土木功成正燦然、蒼髮重
主金碧剎、神祠人貌異当年、

建長寺

当年行脚事如新、巨刹経営了勝因、猶有山僧
懐旧德、一龕紫幕繡三鱗、

七里恒次息渓韻

蘭盆涼動節佳哉、東海之濱探勝来、應
被目乾車一笑、不学浄土向蓮菜、

勝地

且如逆艦引諸宦、百戰功高不復論、千古急難堪永歎鴉州七里即鎖京

絕島

世載重洋逝野鮮、狂奴故態尚依然、只嗤誕鑽難藏老、負被天妃過少年、